The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	事前調査報告【秋田】
Author(s)	末岡, 加奈子
Citation	GLOCOLブックレット. 2012, 8, p. 47-52
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/48330
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

Ⅱ
取り組み事例と課題の共有

事前調査報告【秋田】

末岡加奈子（大阪大学大学院人間科学研究科博士前期課程）

1．全体のなかでの本調査の位置づけ

本ワークショップでは、企画立案者の在住する関西圏のみならず、幅広い視点で「トランスナショナルな子どもたち」の教育問題について学ぶ必要性から、日本全国での取り組みや事例を共有することを目指した。そこから明らかにされるであろう地域性による違い、また普遍性を見出すことによって、今後の実践者の活動に役立てたいと考えた。その一つとして選ばれたのが、相対的に外国籍または外国にルーツをもつ人口の少ない地域で、かつ非常に活発で先駆的な取り組みが行われていることで知られる、秋田県能代市におけるさまざまな取り組みである。そこで私たちは、本ワークショップ開催にあたって、農山漁村地域での貴重な取り組み事例の一つとして、能代市とそれに隣接する藤里町において事前調査を行った。

2．調査地の概要

秋田県能代市は日本海に面し、かつ白神山地の麓に位置する、秋田杉で有名な自然豊かな地である。また、市内に位置する能代港は、石炭を主とする巨大な火力発電所を抱える（写真1、2）。このような、東北地方における過疎化の進行する自然豊かな地においても、大都市圏ほどではないにせよ、1980年代後半頃より外国にルーツを持つ市民の増加が進行し始めた。秋田県全体の外国人登録者数約4,400名に対して、能代市においては2009年12月時点で約300名となっており、その内訳は主に、中国帰国者の定住と、「外国人花嫁」としてフィリピンをはじめとする東南アジアから嫁いできた外国人女性とその家族等である（北川 2010）。

写真1　能代港

写真2　能代火力発電所を臨む「はまなす画廊」

3．調査内容

秋田県能代市の地理的概要についてはおおよそ上に述べた通りであるが、調査においては、隣接する藤里町もあわせて計4ヶ所の

学習会や小学校を訪問し、授業見学、インタビュー等をさせていただく機会を得た。以下で詳しく述べるように、能代市における北川裕子さんを代表とする「のしろ日本語学習会」、藤里町においても北川さんが講師を勤める「藤里町日本語教室」、淳城西小学校、藤里小学校の4ヶ所である。以下に、その一部を紹介する。12月中旬の非常に寒さの厳しい時期であった。

(1)「のしろ日本語学習会」：火曜コース(19:00 ～)

この能代市において、北川さんを代表とする「のしろ日本語学習会」が発足・設立されたのは1994年のことであった。その発端は、1991年に中国残留帰国家族が永住帰国したことを契機に、北川さん個人が通訳および日本語支援者として能代市から委託を請けたことに始まる。

現在では、

毎週火曜日(19:00 ～21:00)：小学生から大人まで誰でも学べる日本語教室

毎週木曜日(10:00 ～ 12:00)：子育て支援を伴う日本語教室

というスケジュールで運営が行われている。

その活動は一貫して、単なる日本語学習機会の提供にとどまらず、「生活者としての自立支援」を目標に掲げた非常に活発で先駆的な活動であるが、設立当初はまだ「嫁に識字教育は不要」と考える人々も多く、現在に至るまであらゆる逆風に立ち向かって来られたといえる。近年になって、地球規模でのグローバル化の波が日本社会のあらゆる地域にも影響をあたえるようになり、本学習会の取り組みが注目を浴びるようになってきたといえる。平成22年には、男女共同参画特命担当大臣による、子ども子育て支援内閣府特命大臣表彰を受賞するに至った。なお、本学習会の活動のありようを研究活動によって詳細に記述した藤田美佳さん(神奈川大学)をワークショップ当日にお招きすることが出来た。

「のしろ日本語学習会」の活動は、子ども・大人にかかわらず市民としての「自立支援」を目標に掲げているため、地域住民を大いに巻き込んだ活動が重視されているのが本学習会の特徴ともいえる。以下に、その活動の一部を紹介する。

まず一つ目に、過疎化と高齢化の進行している農山漁村地域という地域性が挙げられる。日本人男性と結婚する外国人女性には、直感的な言葉でいうなら「農村の花嫁」としての役割が期待される。これをサポートする手立てとして、「だしの取り方」を出発点とした料理教室、お茶会、住民とのバス旅行、書道、生け花、盆踊り等、年間を通じた「日本の行事」への理解促進とコミットメントを重視したイベントが開催されている。また、車での移動が主な交通手段となることから、運転免許取得に向けた日本語能力の獲得、すなわち試験に合格し、そして地域で車を不自由なく運転するための日本語能力獲得に向けた厳しい指導が行われる。

写真３　「のしろ日本語学習会」が行われている公民館

次に二つ目として、子どもに対する徹底的なサポートが挙げられる。一般に、小学校3、4年生の学習内容でつまずくとその先の克服が困難であるとの北川さんの考えにより、学習面でのサポートを重視している。したがって学習会に参加する子どもたちは、学校の宿題や試験勉強等に時間を充てる。前述した通り、この地域では自家用車での交通手段が一般的であるため、参加する子どもたちは通常、学校から帰宅してから19時～21時までの学習会参加にあたっての交通手段や夕食の時間等に、不都合を抱える場合が多い。筆者らが訪問したこの日も、北川さんは5～6人分の手作り弁当を準備されていた。

三つ目に、上記2点とも一部重複するが、「家族を巻き込んだ」活動である。入会時には、配偶者を含む家族との面接を義務づけているとのことであった。学習者にとって、本人の努力のみならず、家族の協力なくしての学習活動はありえないとの考えから、「家族の一員としての協力を惜しむようなら結婚生活も上手くいかないといえる」（北川さん）との理念があってのことである。

「家族や周りの協力」ということばが頻繁に聞かれた。まさに、「共に生きる」ということなのであろう。

なお、会の運営にあたっては学習者、ボランティアスタッフ双方から月会費500円を徴収し、運営費にあてている。これによって、能動的な参加が意識されるとのことであった。活動のサポートには、市民ボランティアが常時6～7名参加することで賄っているが、当会の悩みとしては、「地域に若者がいない」ことが挙げられた。もともと過疎化と高齢化が進む地域であることに加え、地域に大学等の高等教育機関がないことから、市民ボランティアは高齢者が多いようであった。

市民ボランティアの方から聞かれた「支援者がついている子どもには “安心感”が感じられる」とのお言葉は、日々の活動からの実感を伴った、含蓄のある貴重なご意見であった。

(2) 淳城西小学校

本校の日本語教室は、以前は文化庁が予算の半分を負担していたが現在は1/3となっている。各町村の負担分は1/6。淳城西小学校は能代市のなかでも対象となる児童が多いため、支援

員が派遣されている。3人の児童を2人の支援員が週3回5時間（年127日）ずつ担当しており、書き取りの補助や担任教員の負担軽減にあたっている。

日本語指導を受けている児童は3名（2010年12月14日時点）で、翌年度からはもう1名入学予定（フィリピン出身）である。実際は、これらの指導を受けている児童以外にも外国人の親を持つ子どもは複数確認されているが、全員（の保護者）が日本語指導を希望しているわけではない。

北川さんはここでも、週1回ボランティアで子どもの学習を統括して不足分を補っている。秋田県は全体として過疎化、高齢化の進行が著しく、また婚姻率も極めて低いため、外国人をも含めた「婚活」に県が熱心に取り組んでいる。今後は、中国、韓国、ロシアとのつながりをさらに重視しており、したがって、一旦は減少傾向にある外国人市民そして子どもの数も、今後は増加が想定されるとのことであった。

（3）藤里小学校

日本語指導の目標は、「サポートがなくなったときに、一人で学べるようにそのツールをあたえること」との信念の下、学校内では教員間の情報共有、また日本語指導担当者と担任との緊密な情報交換・共有を重視しているとのことであった。また、はっきりと日本語指導が必要だと分かっている子ども以外の児童についても、各教師や校長が「あれ、おかしいな？」と思ったことがあれば、そのつど北川さんに相談する体制をとっているとのことであった。この地域において、世代・人種・国籍を超えた「交流」は、もしかして地域住民の日常に当たり前のようにすっかりと溶け込み定着している、あるいはそれが根ざす土壌があるのかもしれない、と強く感じた学校訪問であった。

〈事例1〉　2年生（実年齢は5年生）の中国出身男子児童に対する支援

1回につき3～4時間、週4回にわたってサポートが行われている。この児童は幼稚園年中・年長を経て小学校に入学した児童で、入学当初から日本語指導を受けている。学習のなかで使う日本語や、日本の学校・教室文化についてのサポートを行い、取り出し授業では日本語指導担当者の主導で生活科、国語、算数の支援を受けている。実年齢は3学年も上級のため、算数については上の学年の内容を学んでいる。また、音楽と体育の授業にも日本語指導担当者が一緒に入ることもある。この児童の場合、母親も日本語での会話ができるため、家庭のなかでの日本語での会話は、一定程度行われている。

写真４　「藤里町日本語教室学習」が行われている公民館

〈事例2〉　5年生のフィリピン出身児童

1年生～3年生時まで日本語指導を受けていた。一定の上達が見られたことから、一旦は特別指導が終了されたが、しかし、現在でもなお分からない言葉が時々あるということで、再度、週1回の日本語指導が開始されることになった。この例に見られるように、「出来ていない子をピックアップ」し、埋もれてしまわないようにするためのキメ細かなケアが日々心掛けられているようであった。

4．コメント

「百聞は一見に如かず」。

北川さんとその活動についてはこれまでに多くのメディアで取り扱われており、畏敬の念を抱いていたが、まさにその現場にほんの少しではあるが触れる機会を頂いたのは、非常に貴重な体験であった。

初日に訪問した「のしろ日本語学習会」が終了したのはおよそ午後9時30分であったが、その後私たちは、学習者の一人であるフィリピン人女性とその配偶者の経営する日本料理店「我が家」にて、インタビューの続きを行った。たいへん盛り上がり、気が付けば午前零時30分を過ぎていた。

それでもまだエネルギッシュな北川さんからは、筆者らが3人寄っても収集仕切れないほどの貴重な情報とご経験を提供していただき、そのお心遣いと体力には、あらためて敬服するほかなかった。最後に、特に印象的であったのは、以下のことであった。

のしろ日本語学習会は、“楽しく交流をするため”の場ではない。
なぜならば、楽しいだけでは、本当に生活者として自立できない。

現実を見据えた、厳しい言葉である。しかしそれは、まず何よりも、言葉や文化・習慣の異なる「日本という場所」で、各々のルーツや文化を大切に、かつ誇りをもって暮らしていくことを実現するための、厳しくそして優しい北川さんの愛情のこもったお言葉である。

この学習会には、地域の小・中学校でALT（Assistant Language Teacher）として活動している英語を母国語とする外国人も参加しており、「一度は帰国したが、プライベートで再来日し、ここで学んでいる」という人もいるほど、互いの信頼関係は厚い。

東北秋田の雪深い自然豊かな地域で、“古くから地域に暮らす人々”と“新しく来た人々”が共に地域を作っていくという、雪も溶けんばかりの熱い実践を目の当たりにし、あらためて背筋を伸ばす機会になったことは言うまでもない。ご協力いただいた秋田県能代市と藤里町の市民の方々、そして学校関係者の方々には、この場をかりてお礼を申し上げたい。

参考資料

藤田美佳
2008 「日本人男性と国際結婚した海外出身女性の日本語学習」、『解放教育』490:33-43。
2010 「外国人住民の生活を支援する」、妻鹿ふみ子［編］『地域福祉の今を学ぶ』ミネルヴァ書房、pp.214-226。
北川裕子
2010 「生活者としての自立支援――「のしろ日本語学習会」の取り組み」、『地方議会人』41: 26-30。
能代市ホームページ
http://www.city.noshiro.akita.jp、2011年9月1日参照。